
遥かなる旅

白波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙かなる旅

【Nコード】

N1484X

【作者名】

白波

【あらすじ】

フタバタウンに住む少女、マオとアキはナマカマド博士にポケモンをもらって旅立つ。方向音痴のマオと異常なほど心配性のユキ。二人はそれぞれ目的を持って旅をするが旅立ち早々さまざまなトラブルに巻き込まれる。これはそんな二人の物語である。この物語はサトシがイッシュ地方を旅している頃から始まります。

第一話 旅立ちの朝

ポケットモンスター縮めてポケモン

この世の不思議な不思議な生き物

あるものは山に海に空に大地にと様々なところに生息している

ポケモンの数だけ出会いがありポケモンの数だけ別れがある

この物語はそんな世界に住む二人の少女が出会いと別れを繰り返して成長してゆく旅の記録である

シンオウ地方 フタバタウン

この町に住む少女マオは朝起きると自室の窓を開け太陽の光と心地よい風を受ける。

「今日はついに待ちに待ったポケモンがもらえる日なんだから気合を入れて行かなきゃ！」

と言うとマオは階段を下り

「ママ！おはよう！」

とあいさつをしてから食卓に置いてあるパンをトースターに入れる。

マオが焼きあがったトーストを食べ始めると横で母のポケモンであるポッチャマがマオが出したポケモンフーズを食べ始める。すると母があくびをしながら起きてくる。いつも通りの日常の風景だが今日からは旅に出てこの家を離れるのでしばらくは見れないだろう。

トーストを食べ終わるとマオは「初めてのポケモン」というタイ

トルの本を読みながら一緒に旅立つと約束したユキとの待ち合わせの時間を待っていた。

本を読んでいたマオがふと顔をあげると掛け時計の時計の針は約束の11時を過ぎて12時を指していた。

「しまった！」

と言うとマオは急いでそばに置いてあったシヨルダーバックをつかみ「行つてきまーす！」

と言い家を飛び出した。その後ろ姿を見て母は

「まったく…本を読んでいるときは何を言っても聞かないうえにいつもこうなるのよね…。」
とつぶやいていた。

その頃フタバタウンの入口では…

ユキは約束の時間の30分ほど前に集合場所に来たが約束の時間を1時間過ぎてもマオが現れないためあっちへこっちへうろろしながらマオを待っていた。

ユキの妄想

マオちゃん遅いよな…どうしたんだろ…まさか！ここに向かう途中で悪い人に捕まったとか！？だとしたら電話とかが来てて…いや…もしかしたら悪い人たちに…それとも…私が時間を間違えてマオちゃんが行つちやっただとか？だとしたら早く追いかけないと…だとしたらマサゴタウンだけど…そこに行く途中で変なポケモンに連れ去らわれて人質にされたりとか…

ふたたびマオ…

マオはフタバタウンの町中を全速力で走っていた。

入口の方へ来て人影が見えてくると

「おーい！ユキちゃん！」

と声をかけた。するとユキは

「マオちゃん！よかった！無事で！」

と言いながら駆け寄ってきた。

「どうしたのよ！？ユキちゃん？」

とマオが言うとユキは

「だって！マオちゃんがあんまり遅いから悪い人に誘拐とかされてどこかに行っちゃったんだと思っただけだから！」

と言った。

「あのお…ユキちゃん…そんなことあるわけないでしょ…本を読むので夢中で遅れただけよ…」

とマオが説明するとユキは

「本当にそうなの？なんか大げがしてまともに動けないのに無理してきたとかそういうのじゃないよね？だったら家で…」

と言いかけたがマオが

「だーかーらー！本を読んでたら時間が過ぎてたの！」

と言うとユキは

「そうならいいんだけど…無理しないでよ…」

と一応納得（？）はした。

「とにかく！行こう！マサゴタウンへ！」

と言ってマオが歩き出そうとすると

「待って！」

とユキが呼び止めた。

「どうしたの？」

とマオが聞くとユキは

「もしかしたら…フタバタウンを出た瞬間ポケモンに襲われて持ち物全部持ってかれて拳句の果てに宇宙人に…」

と言いだしたがマオは

「大丈夫だから！行くよ！」

ととどどん負のスパイラルが加速するユキの手を引き201番道路をマサゴタウンの方向へ歩き出した。

...^UUU

第一話 旅立ちの朝（後書き）

こんにちは！白波です！

これからよろしくお願いします。

第二話 シンジ湖からマサゴタウンへ

マサゴタウンのナマカマド博士のところにはポケモンをもらいに行くためフタバタウンから旅立ったマオとユキはなぜかシンジ湖に来ていた。

「あのさ…」

とユキが言うとマオは

「なに？ユキちゃん？」

と聞いた。

「もしかして…マオちゃんって方向音痴？」

とユキが言うとマオは

「そっそんなわけじゃないでしょ…あはは…」

と言った。するとユキは

「そうじゃないとしたら…もしかしたら…マオちゃんはわざと私をここに連れてきて悪い人たちに合流して…」

言いだしたがマオが

「だーかーらー！悪い人とかそういうのはそうそういないから！まったくもっ…ユキちゃんったら…ちよつと旅立つ前にこの湖見ておきたかったのよ…」

と言いながら湖のほとりに歩いて行った。

「ユキちゃんもおいでよ！」

とマオが言うとユキは

「もしかしたら…湖に近づいた途端岸が崩れて湖に落ちて…」

と言いだすがマオは

「心配ならそこで座ってなよ…」

と言って湖のほとりに座った。

（おかしいな…マサゴタウンはこっちだと思ったのに…私が方向音痴とかは断じてないはずだから…ちよつと道を間違えただけよ！と
りあえず別の道を行けば着くかな…。）

と考えマオがユキの方に歩いていくとユキが

「あれ…。」

と言いながら湖の方を指差した。

「あれって?」

と言いながらマオが振り向くがただ湖が静かに波を立てているだけだった。

「何も無いよ!」

とマオが言うとユキは

「さっきなにかがいた…透明の…。」

と言った。

「なにか見間違えたんじゃない?とりあえずマサゴタウンに向かおう!」

と言うとマオはユキと共に湖を後にした。

マサゴタウン

昼間にフタバタウンをでた二人は日もすっかり暮れた夜になってマサゴタウンに着いた。

「やっと着いたね!」

とマオが言うとユキは

「マオちゃんが寄り道ばかりするからね…もしかしたら…ポケモンをもらえらえる日を一日間違えていたりしてそれをごまかそうとして…いや…マオちゃんはそんなことしないから、やっぱり…」

と言いだすがマオは

「とにかく!ナマカマド博士のポケモン研究所に行こう!」

と言ったがユキが

「もしかしたら…こんな時間に行ったりして怒られて拳句の果てにポケモンももらえず…警察に追われる身になったりとか…」

と言いだすと

「警察には追われなと思うけど…確かにこんな時間に行ったら迷惑ね…ポケモンセンターに行きましよう…」

と言ってポケモンセンターがあるであろう方向へ歩き出した。

一時間後…

結局マサゴタウン中を歩き回った結果ようやくポケモンセンターに着いた。

「マオちゃん…やっぱり方向音痴なんじゃ…。」

とユキが言うがマオは

「だーかーらー！そんなわけないでしょ！今日はさっさと寝て！明日研究所に行くわよ！」

と言うと二人はジョーイさんに行って二人部屋に泊まることにした。ポケモンセンターは便利な施設でポケモンの回復を無料でやってくれるだけでなく旅をするトレーナーの宿としての機能も果たしている。また、地方によってはポケモンセンターの中にショップが併設されておりキズぐすりやモンスターボールといった旅をするうえで必要な道具がそろえられる。

次の日…

「こつちかな…やっぱりこつち？」

とつぶやきながら地図を見ながら歩くマオの後をユキが歩いている。

「やっぱり迷ってるんじゃないの？」

とユキが聞くとマオは

「違ってる！こつちで会ってるはず…。」

と言いながら角を曲がると白髪に白いひげを蓄えたこわもての男性とぶつかった。

「すみません…。」

とマオが謝るとその男性は

「君たちは…ちょっときつちに来なさい…。」
と言いながら歩き出した。

つづく…

第二話 シンジ湖からマサロタウンへ（後書き）

こんにちはー白波です！

読んでいただきありがとうございます。

次回もよろしくお願いします。

第三話 初めてのポケモン

マサゴタウンで迷子に「違う!」「マオちゃん誰に話しかけてるの?もしかしたら…」。「作者よ!作者!」…マサゴタウンを歩いていたマオとユキは途中で出会った男性の後ろを歩いていた。

「誰なんだろう…あの人…。」

とマオが言うとユキは

「もしかしたら…あの人とっても悪い人で私たちを…」

と言いだしたが

「だから!そんなこと言わない!」

と言ってそれを止める。

しばらくその男性について歩いていくと大きな建物についた。

「ここが、私のポケモン研究所だ。」

と言うとマオが

「私の…ってあなたナマカマド博士だったんですか!」

と言った。するとナマカマド博士は

「なんだ…君たち私が誰かわからないのについてきたのかね?」

と少しあきれたような顔をして言った。

研究所の中の案内された部屋に入るとそこにはモンスターボールが三つおいてあった。

「このモンスターボールにはシンオウ地方の初心者用ポケモンであるペンギンポケモンのポツチャマ、わかばポケモンのナエトル、こざるポケモンのヒコザルの三匹が入っている。」

と言いながらナマカマド博士はモンスターボールから三体のポケモンを出した。するとマオは

「私はヒコザルがいい!」

と言ってヒコザルを抱いた。抱かれているヒコザルはとてもうれしそうにしている。するとユキは

「わっ私は…ナエトル…。」

と言うとユキはナエトルを抱き上げた。ナエトルはもともそうだからだろつか？落ち着くのか、はたまた少しばかりおびえているのか、とてもおとなしくしている。その瞬間胸を張って選ばれると思っていたのかポツチャマはかなりショックだったらしくその場で固まってしまった。

「あっポツチャマが…もしかしたら…このままこの子が…」

とユキが言いますがマオは

「まったく…ユキはいちいち心配しすぎなの！」

と言ってから

「博士！ありがとうございます！」

と言った。

「ところで君たちはこれからどうするのかね？」

とナマカマド博士が言うともオオは

「私は各地でジム戦をしたいと思います！」

と答えた。そのあとにユキが

「私は…コンテストに…」

と答えた。するとナマカマド博士は

「うむ！よろしい！それではこの町を出て北にあるコトブキシテイへ向かうといい！そこでもうすぐポケモンコンテストが開催されるぞ！それにクログネジムがあるクログネシティも近いからな！それと後これはポケモン図鑑だ！ポケモンたちを大切に！」
と言いながらピンク色のポケモン図鑑を出した。

ポケモン図鑑にはあらゆるポケモンのデータが入っておりそのポケモンがどんなポケモンであるかだけでなく自分のポケモンの憶えているわざや能力なども見ることができる。

ポケモン図鑑を受け取るとマオは

「はい！」

と答えて研究所を出てコトブキシティへ向かった。

「ユキちゃん！ついに私たちもポケモンがもらえたね！よし！張り切って行こう！」

とマオが言うとユキは

「もしかしたら…旅の途中で大けがして二度とおうちに帰れないかも…それならまだしも…もっととんでもないことに巻き込まれて…」
と言いだしたがマオが

「ユキちゃん…考えすぎだつて…ほんと、昔から変わらないよね…旅をしたら少しは変わるんじゃないの？」

と言った。それに対しユキは

「旅で自分を変える…もしかしたら変わりすぎてみんな私が誰かわからなくなるかも…でもそれだけならまだしも…」

とふたたび言いだしたがマオは

「まあいいか…」

とつぶやいて二人で仲良く歩いて行った。

ポケモンももらったが二人の旅はまだ始まったばかりだ！

つづく…

「おーい！そっちはフタバタウンの方向だよ！」

と助手に呼び止められマオは

「あっ！北つてこつちだった！」

と言って今度こそコトブキシティの方へ歩き出したのであった。

つづく…

第三話 初めてのポケモン（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

第三話にしてようやく主人公がポケモンを持ちました。

これからもよろしくお願いします。

第四話 ライバル登場！マオ対ユウキ

ポケモンをもらい旅に出たマオとユキはポケモンコンテストに出場するためコトブキシティへ向かう途中近道をするため森の中を歩いていた。

「マオちゃん：こっちで大丈夫なの？もしかしたら：このまま一生この森から出られないんじゃない？：やっぱり地図に書いてある道を通った方が：でもそっちを通っても突然悪い人に襲われて：」

とユキが言いだすとマオは

「大丈夫だよ！こっちから行けば絶対に近いから！」
と言いながらさらに森の中を進んでいった。

しばらく歩くと同じように森の中を歩く少年とであった。その少年はマオ達を見るなり

「お前たちポケモントレーナーか？」

と聞いた。マオが

「ええ…。」

と答えるとその少年は

「だったらバトルしようぜ！俺はミオシティ出身のユウキだ！お前は？」

と言った。

「私はフタバタウン出身のマオです…私、旅に出たばかりでポケモン一匹しか持ってないんだけど…。」

とマオが言うとユウキは

「別にいいぜ！それじゃあ一対一でどうだ？」

と聞いた。マオが

「もちろんです！ユキ…審判頼める？」

と言うとユキは

「ええ…でも…もしかしたら…審判やったはいいけどわざが飛んできて大けがして…そんでもって…」

と言いだすがマオは

「わざあったたりとかそうそうないから！やるならやって！」

と言つとユキは二人の間に立ち

「これから、フタバタウン出身のマオ対ミオシティ出身のユウキのバトルを始めます…使用ポケモンは一体どちらかのポケモンが戦闘不能になった時点で試合終了といたします…それではバトル終わり！じゃなくて…始め！」

とユキが言つとマオは

「頼んだわよ！ヒコザル！」

と言いながらヒコザルを出した。その対し相手は

「行くぞ！ムツクル！」

と言つてムツクルを出した。

「あのポケモンはムツクルね…。」

と言いながら図鑑をかざすと

『ムツクル むくどりポケモン ムクバードの進化前 群れを作ることで一匹の弱さをカバーしている。タイプはノーマル・ひこう』
という解説が出た。

「ヒコザル！先手必勝よ！ひっかく攻撃！」

ヒコザルがムツクルに迫るとユウキは

「ムツクル空に飛んでよけてからつばさでうつ！」

と指示をだした。

ムツクルは空へはばたきヒコザルの攻撃をかわすとつばさでうつを放った。攻撃はヒコザルに命中し後に飛ばされた。

「ヒコザル！がんばって！」

とマオが声をかけるとヒコザルはゆっくりながらも立ち上がる。

「反撃よ！ひっかく攻撃！」

「ムツクルもう一度つばさでうつだ！」

「ヒコザル！かわしてもう一度ひっかく！」

ムツクルはヒコザルに向かってつばさでうつを放ったがヒコザルはそれをかわし低空飛行していたムツクルに攻撃を命中させた。

「ヒコザル！そのままムツクルにつかまって！」

とマオが言うとヒコザルはムツクルの背中につかまった。

「ムツクル！ヒコザルを振り落せ！」

というユウキの声を聞きムツクルは右へ左へ旋回するがヒコザルは離れない。

「ヒコザル！ひっかく攻撃！」

とマオが言うとヒコザルはひっかくを放とうとしたがバランスを崩してムツクルから落ちてしまった。

「いまだ！ムツクル！とどめのつばさでうつ！」

とユウキが言うとムツクルはヒコザルにつばさでうつを放ちつばさでうつを直撃されたヒコザルは倒れてしまった。

「ヒコザル…先頭不能…よって勝者ミオシテイ出身のユウキ…。」

とユキが言うとユウキは

「よくやったぞ！ムツクル…。」

と言ってからマオの方を向き

「いいバトルだったな…またどこかであったらバトルしようぜ！もちろん！それまでにお互いもつと強くなってから！」

と言った。マオは

「もちろんよ！」

と答えるとユウキと握手をした。

「これで俺たちはライバルだな！またどこかで会おうな！」

と言うとユウキはさっきマオ達が歩いてきた方向に歩いて行った。

「さてと…私たちも行くか…。」

とマオが言うとユキは

「そうね…でも、もしかしたら…向こうに行ったらさらに迷子になって…。」

と言いだすが

「迷子じゃないから大丈夫だよ…。」

とマオが言つと

「それならいいんだけど…。」
と言いながらマオとともに歩き出した。

始めてポケモンバトルをしたマオ。結果は負けだがライバルのユウキとまた会うことを約束し二人の旅はまだまだつづく…

第四話 ライバル登場！マオ対ユウキ（後書き）

こんにちは！白波です！

バトルのシーンいかがだったでしょうか？バトルの描写等は苦手なので読みにくかったかもしれません…。

これからもよろしく願います。

第五話 ロケット団現る（前編）

ユキがポケモンコンテストに出場するためコトブキシティへ向かっているマオとユキは森の中の小さな広間で昼食をとっていた。

マオはユキが作ったサンドイッチを食べると

「おいしい！やっぱりユキが作った料理は最高ね！」
と言った。するとユキは

「それならいいけど…もしかしたら…賞味期限が切れて…」
と言いだしたが

「食べる気がなくなるでしょうが！」
とマオが言うとユキは黙ってしまった。

「ところでさ…ユキって昔から変なことばかり考えるけど…もうちょつと明るく考えられないの？そう…ポジティブにさ！」

とマオが言った。

「ポジティブに…ポジティブに…私の作った料理はおいしいって言うってもらえて…」

「そうそう！そんな感じ！」

「それでもって…それで…変なものとか間違っ入れてマオちゃんか…」

とユキが言うとマオは

「ストツプ！また変な風に考えてるし…。」

と言った。

「ごめん…やっぱりあれ以来…」

とユキが言うとマオは

「まあわからないこともないけどさ…。」

と言った。すると森の中から突然ポケモンが飛び出してきた。

「あのポケモンは？」

と言いながらマオが図鑑をかざすと

『コリンク そんなこうポケモン ルクシオの進化前 体を動かすたびに筋肉が伸び縮みして電気が生まれる。ピンチになると体が輝くタイプはでんき』

という説明が出た。するとその少しあとから

「その子止めてくださいーい！」

と言いながら一人の少女が駆けてきた。

コリンクの近くにいたユキがコリンクを抱き上げるとコリンクは嫌がって右へ左へ抵抗する。少女はユキからコリンクを受け取ると「ありがとうございます…私アキといいます。」

と言った。

「私はマオです！」

「私は…ユキ…。」

と二人がそれぞれ答えるとアキは

「マオさんにユキさんね…二人ともよろしく…。」

と言った。

「ところでどうしてコリンクが逃げてきたんですか？」

とマオが聞くとアキは

「はい…それが…コリンクと一緒にコトブキシティのコンテストに出ようと思って道を歩いていたら…突然変な三人組に襲われて…コリンクが先に逃げて行っただんです…。」

と答えた。

「その三人組って？もしかしたらとんでもない組織の下っ端とか？」

とユキが聞くとアキは

「さあ…あの人たちが誰だかさっぱり…。」

と言った。するとわかかなのようなものが飛んできてコリンクを縛ってしまった。

「コリンク！いったい誰がこんなこと！」

とマオが言つと

「いったい誰がこんなこと！と言われても答えないのが常識だが…まあ今回ぐらいは答えてやろう！」

と言うと男女三人が姿を現して

「光よ！」

「水よ！」

「ポケモンよ！」

「天をも震わせるミュージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば」

「誰もが立ち止まる重い響き」

「エリ！」

「マリコ！」

「ダイキ！」

「今回も主役は私達！」

「我ら天下無双の」

「『ロケット団』」

と名乗るとその横からスカンプーとピッピが出てきた。

「ロケット団？何それ？」

とマオが言うとユキが

「聞いたことがあるわ…カントーを中心に暗躍する人のポケモンを奪う悪い人たち…。」

と言った。

「珍しいわね…。」

とマオが言うとユキは

「もしかしたら…目を付けられて、挙句の果てには…。」
と言った。

「やっぱりこうなるのか…。」

とマオがつぶやくとエリが

「私たちの事…忘れてるでしょ！」
と言った。するとマオは

「あっ！そうだった！あなた達！コリンクを返して！」
と言った。それに対しダイキは

「返せって言われて返す奴はどこにもいねーよ！そんなじゃあポチっとな。」

と言ってボタンを押すと森の中から気球が出てきた。

「こら！待ちなさい！」

とマオが言うが三人と二匹はコリンクを連れて気球に乗ってしまった。

「それじゃあ！帰る！」

と言うと三人は気球で空へ飛んで行ってしまった。

コリンクがロケット団と名乗る謎の集団に奪われてしまった。マオはユキはそしてアキはコリンクを取り戻すことができるのだろうか？

つづく…

第五話 ロケット団現る（前編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ロケット団が名乗るときのセリフはDPの時のものを参考にしています。（個人的にDPの時ののが好きなので）

これからもよろしく願います。

第六話 ロケット団現る（中編）

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストの出場するため旅をしていたマオとユキはロケット団を名乗る組織に遭遇した。

「あいつらどこにいたのよ！」

とマオが言うとユキは

「もしかしたら…もう遠くの方に行つてて…コリンクは…。」

と言うがマオは

「そんなこと言わない！」

と言ってロケット団の気球を探す。

「コリンク！どこ？」

とアキが呼びかけるがコリンクの声は聞こえない。

「三人で分かれて探しましょう！」

とマオが言うとユキとアキはうなずいて三人はそれぞれ別の方向へ行った。

ユキが森の中を歩いているとムツクルの群れがいた。

「ムツクル…そうだ！」

と言うとユキは

「ナエトル！行って！」

と言いながらナエトルを出した。

「ナエトル！ムツクルのたいあたり！」

ナエトルは迫りいきなりの奇襲に驚いたムツクルの群れは混乱している。たいあたりはその内の一体に命中した。

「華麗に決めるわよ！モンスターボール！」

ユキが投げたモンスターボールはムツクルにあたり揺れ始めた。

「一回…二回…三回…」

とユキがつぶやいていると

カチッ！

という音とともにモンスターボールが止まった。

「やった！ムツクルゲットで心配なし！」

とユキが言くとナエトルが横でとても喜んでいた。

「出てきてムツクル！気球を探して！」

と言いながらモンスターボールから出すとムツクルは気球を探して飛んで行った。

「でも…もしかしたら…このままムツクルが返ってこなくて、逃げられちゃうかも…それならまだいいけどあいつらにつかまって…」
と言いだしたユキを横でナエトルは半ばあきれた様子で見っていた。

ちょうどそのころマオが歩いていると先ほどの気球が見えてきた。

「あっ！あれは！」

と言つとマオは気球を追いかけだした。

「早い！」

気球

「あっ！あの子さっきの！」

とダイキが言つとエリが

「ここまで追いかけてくるなんてね…ダイキ何とかしなさい！」
と言った。

「わーたよ…ポチツとな！」

と言つてボタンを押すと気球の高度は上昇した。

「こーらー！ここからじゃヒコザルの攻撃は届かないし…。」

と言っていると空を飛んでいた一匹のムツクルが気球を見て元来た方向へ戻って行った。

「なんなの？あれ…。」

アキはというと森の中を走り回っていた。

「あいつらどこに行ったのよ…。」

とつぶやくと群れで行動することが多いムツクルが一匹で飛んでいた。

「ムツクル？確か群れで行動するはずなのに…誰かのポケモンなのかな？」

と気になったことをつぶやいたがとにかく気球を探することに専念することにした。

ふたたびマオ

「ハア…ハア…どうすりゃいいのよ…。」

と森の中で息を切らして立ち止まっていると先ほどのムツクルだろうか？ロケット団の気球に攻撃を始めた。攻撃を受けた気球は徐々に高度を下げていく。

「なんかよくわからないけど…チャンス！」

と言つとマオは気球が落ちて行った方へ走り出した。

しばらく走ると

「せっかくコジロウさん達にもらった気球が…。」

とダイキがつぶやくと

「また修理して使えばいいわよ…。」

とマリコが答えた。

「あなた達！コリンクを返しなさい！」

とマオが大声で言うがダイキは

「でも、これ修理費結構かかるんじゃない？」

と言った。それに対しエリは

「つべこべ言わない！あんたならなんとかできるでしょ！」

と答える。

「ちよつと人の話聞きなさいよ！」

とマオが言つとエリが

「なに？いたなの？」

と言った。

「いたわよ！コリンクを返しなさい！」

とマオが言つとエリが

「こつなつたら力づくでも逃げるわよ！行け！スカンプー！」
と言いながらスカンプーを出した。

『スカンプー スカンプーポケモン スカタンクの進化前 お尻から強烈に臭いにおいの液体を飛ばして身を守る。匂いは24時間消えない。タイプはどく・あく』

「お前もだ！」

「あなたもよ！」

と言つとダイキとマリコはそれぞれフワンテとピッピを出した。

『フワンテ ふうせんポケモン フワライドの進化前 人やポケモンの魂が固まって生まれたポケモン。じめじめした季節が大好き。タイプはゴースト・ひこう』

『ピッピ ようせいポケモン ピイの進化系 愛くるしいしぐさで

大人気。静かな山奥で仲間たちと暮らしていると考えられている。タイプはノーマル』

「三体もいっぺんに…どういつつもり？」

とマオが言つとエリは

「何って？決まってるじゃない…三体でいっぺんに攻撃するのよ！」

ロケット団と三対一で戦うことになったマオ。はたしてアキのコリンクは取り戻せるのか？

つづく…

第六話 ロケット団現る（中編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

第七話 ロケット団現る（後編）

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するためコトブキシティへ向かっていたマオとユキは途中ロケット団と遭遇しアキのコリンクが奪われてしまった。はたしてコリンクを取り戻せるのだろうか？

「何のつもりって…三体でいっぺんに攻撃するに決まってるでしょ！スカンプー！みだれひっかき！」

とエリが言つと続いてダイキが

「フワンテ！かぜおこしだ！」

と言つた。そのあとマリコが

「それじゃあ私も…ピッピ！おうふうビンタです！」
と指示を出す。

「ヒコザル！かわして！」

という声を聞きヒコザルは技をかわすが次々と飛んでくる攻撃をかわしきれなかった。

「ヒコザル！」

とマオが言つとエリは

「威勢がいいけど…よわっちいわね…。」
と言つた。

「まだまだよ！ヒコザル！ピッピにひっかく！」

とマオが言つとヒコザルはピッピに迫るが

「ピッピ…おうふうビンタです！」

という指示を聞いたピッピのおうふうビンタで跳ね飛ばされてしまふ。

「ヒコザル！頑張つて！」

とマオが言つとエリは

「うるさいトレーナーね！スカンプー！トレーナーにどくガス！」

と言った。

「えっ！」

とマオが言っているるとスカンプーはマオの方へ攻撃を出した。

マオは息を止めて必死にガスを吸わないようにしているが

(やばい…これを吸ったら…でも…もうダメ…。)

と思っただ瞬間。

「ムツクル！あのガスを吹き飛ばして！」

という声の後に森の中からムツクルが飛んできてガスを吹き飛ばした。

マオが力が抜けたのか気を失って倒れてしまうと

「マオちゃん！」

と言いながらユキが飛び出してきた。さらにそれに続くようにアキが出てきて

「あなた達！三体一の上にトレーナーを攻撃するなんて何を考えるのよ！」

と言った。するとエリは

「じゃまだだったからやっただけよ…まっ！威勢がいいだけで弱かったけど…」

と答えたが後ろの方でダイキとマリコが

「三対一までならまだしもトレーナーを攻撃するのはやりすぎだよな…。」

「そうですね…さすがにそこまでは…。」

というような会話をしていた。それを聞いたエリは

「私たち悪役でしょうが！それくらいやりなさいよ！」
と二人に言った。

「…とは言ってもねー」

と二人が声をそろえて言うとエリは

「もういいわよ！コリンクはこっちにいるんだし…っていないじゃん！」

と言った。振り返ると檻が開いておりそこにいたはずのコリンクが

いなくなっていた。

「コリンクなら、さっきあなた達がゴチャゴチャ話している隙に取り返させてもらったわよ…。」

とアキの聲がした。アキの方を向くと確かにアキの横にコリンクがいた。

「ユキちゃん！反撃するわよ！コリンク！スパーク！」

「私も…ムツクル…つばさでうつ…ナエトルはたいあたり…。」

と二人がそれぞれ指示を出すとムツクルとコリンク、ナエトルはそれぞれロケット団のポケモンを攻撃し始めた。

三体が出した攻撃はそれぞれ命中した。

「コリンク！とどめのスパーク！」

コリンクがスパークを放つと小さな爆発が起こり

「…やな感じ…」

と言いながら三人は飛んで行きキラーンとお星さまになってしまった。

「よく飛ぶわね…。」

とアキが言つとユキは

「もしかしたら…あの人たちが変なところに飛んで私たちの恨みを持って襲ってきたりとか…」

と言つがアキは

「大丈夫じゃないの？つてマオちゃんは！」

と言いながらマオの方を向くがマオはまだ意識が回復してなかった。

「大変！急いで治療しないと！」

「…ちゃん…マオちゃん！」

という声でマオがゆっくりと目を開けると

「マオちゃん！よかった！心配したんだから！このまま目を覚まさないかと思った！」

と泣きながらユキが抱きついた。

「ユキは？」

とマオが聞くとアキが

「病院よ…マサゴタウンの…お医者様呼んでくるわね…。」
と言い残し病室を出て行った。

「マサゴタウン…また戻ってきちゃったんだ…。」

とマオが言うとユキは

「戻ったもなにも…私たちずっとマサゴタウンのあたりをうろしてただけみたいよ…。」

と言った。するとマオは

「なんだ…そうだったの…。」

と言うと思いついたように

「そうだ！コリンクは？」

と言った。

「コリンクは無事だったよ…ちゃんと取り返したから…。」
とユキは答えた。

「そう…よかった…。」

とつぶやくとマオは寝てしまった。

一方その頃アキの攻撃で飛ばされたロケット団は木に引っかかっていた。

「あいつら！絶対復讐するんだから！」

とエリが言うとダイキは

「また始まったよ…昔からエリは根に持つからな…。」
とつぶやいた。

無事コリンクを取り戻したマオ、ユキそしてアキ。マオとユキの旅はまだまだつづく…

第七話 ロケット団現る（後編）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第八話 マサゴタウンの病院で…

ユキがポケモンコンテストに出場するためコトブキシティへ向かっていたマオとユキは途中ロケット団に襲われ病院にいた。

「少しとはいえスカンプーのどくガスを吸ってますからね…念のため一週間はここで入院することをお勧めいたします…。」

と医者が言つとマオは

「旅は続けられますか？」

と聞いた。

「それはできると思っけど…とりあえずフタバタウンの君の母親に連絡したから…またあとでいいから君もジュンサーさんに事情を話してくれるかな？」

と医者が言つとマオは

「はい…。」

と答えた。

マオは病室に戻るとお見舞いに来たユキに

「ここで一週間入院だつてさ…。」

と言つとユキは

「そう…もしかしたら…一週間つてのは…」

と言つた。マオが

「ユキちゃん…縁起でもないこと言わないでよ…でも…コンテスト間に合わないね…。」

と言つとユキは

「ごめん…縁起でもないこと言つて…それに別にいいのよ！コンテストの事は…また別のところでも開催されるし…それにたぶん出たとしてもちゃんと出来ないよ…マオちゃんが大変なのに…。」

と答えた。するとマオは

「先に行つてて…。」
と小さな声で言った。

「えっ？」

とユキが聞き返すとマオは

「先にコトブキシテイへ行つてつて言つてるの！マオちゃんコンテ
ストに間に合わないじゃない！後で追いつくから…。」

と言った。

「マオちゃん…でも私は…さっきも言つたけど…」

とユキが言うのをマオはさえぎるように

「私のことなんか気にしなくていいから…行つて！」
と言った。

「マオちゃん…。」

とユキがつぶやくと病室の入り口から

「確かにここに一週間いたらコンテストには間に合わないわ…。」
という声がした。ユキが振り向くとそこにはアキが立っていた。

「でもね…マオちゃん…ユキちゃんや私はあなたの事が心配なのよ
…特にユキちゃんは…幼なじみがこんなことになったら誰だつて心
配するわよ…私もリンクを必死に取り返そうとしてくれた人をほ
おつておいてのんきにコンテストなんか出てられないわ…。」

とアキが言うとユキは

「アキちゃんの言う通りよ！私たちはマオちゃんが何と言おうと退
院するまでお見舞いに来るからね！」

と言つとマオは

「少し一人にさせて…。」

と言った。するとユキは

「わかった…。」

と答えてアキと共に病室を出た。

一人になるとマオは

「私つたら何を言つてるんだらう…。」

とつぶやいた。気が付くと目から流れてきた涙がシートに一滴、二滴と落ちていった。

ユキとアキは病室から出ると休憩室へ行った。

「マオちゃん…怒っちゃったのかな…もしかしたら…もう口きいてくれないかも…それならまだしも私の顔も見たくないかもしれない…。」

とユキが言うとアキは

「そんなことないわよ…マオちゃんたぶん私たちに気を使ってるんじゃないかな…グランドフェスティバルまでに開催されるコンテストの回数も限られてるし…。」
と答えた。

「そうだといけど…。」

とユキが自信なさげに答えるとアキは

「あなた達幼なじみなんでしょ！大丈夫だって！」
と言った。

そんな様子を上空の気球から望遠鏡で見ているロケット団の三人組の姿があった。

「見つけた！ぜったい復讐してやるんだから！」

とエリが言うとマリコが

「ちよつと…復讐とかそういうのよりもやるべきことがあるんじゃないやありません？」

と聞いた。

「私のやることに口を挟まないで！私をコケにしてくれた礼は絶対するんだから！」

とエリが言うとダイキが

「こりゃ止められんな…。」
とつぶやいた。

「ダイキ！なんかメカ作りなさい！」

とエリが言つとダイキは

「メカつて？」

と聞いた。

「復讐するためのでしょ！あんに任せるから！」

とエリが言つとマリコが

「ただでさえ予算がないのでそんなことに使うのはどうかと…。」
と静かに抗議するがエリは聞く耳を持たない。

「とにかく！さっさと作るのよ！いい？私のスキャンプーのどくガスを吸ったはずだから一週間ぐらいいはあいつらこの町にいるはずね…だから一週間以内に作つて！」

とエリが言つとダイキはめんどくさそうに

「わかつたけどさ…一週間じゃなかなか予算の都合上厳しいんだけど…。」

と答えた。それに対し

「そこはあんたが何とかしなさい！」

とエリが言つとダイキは

「やっぱり…。」

とつぶやいた。

マサゴタウンで入院することになってしまったマオ…二人の旅はまだまだ続く…

第八話 マサゴタウンの病院で…（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

第九話 マサゴタウン それぞれの…

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅をしていたマオとユキはマサゴタウンでマオが入院したたマサゴタウンにいた。

マオは病室の窓から見える景色を眺めながら横にいたヒコザルに「ねえ…ヒコザル…。」

と話しかけた。ヒコザルがマオの方を向くと

「旅って思ったよりも大変だよね…ごめんね…いきなりこんなことになっちゃって…。」

と言いながら頭をなでるとヒコザルはうれしそうに顔をしている。

「あなたはそういうこと気にしないのかしら…。」

とつぶやくとマオはヒコザルの頭をなでるのをやめて再び外を見た。

「早く旅の続きがしたいな…。」

とマオはつぶやいた。

ユキとアキが花屋でお見舞いのための花を見ているとアキが

「ねえ…ユキちゃん…あの人って…。」

と言いながら一人の少女を指差した。ユキがそっちの方を見ると頭に緑色のバンダナをした少女が花を選んでいた。

「あれってさ…ハルカじゃない？」

とアキが言うとユキは

「そうかもしれないけど…もしかしたら間違ってる…それで…。」
と言うがアキは

「間違ってるなら謝りゃいいじゃん！」

と言ってその少女の方へ行った。

「あの…もしかして…ハルカさんですか？」

とアキが聞くとバンダナを付けた少女が

「そうだけど…。」

と答えた。するとアキは

「やったユキちゃん！本物よ！本物！本物のハウエンの舞姫ハルカさんよ！」

とやや興奮気味に言った。

「ほんとにほんとに本物！すごい！こんなところで会えるなんて！」
とユキが言うとハルカは

「そんなに言われると照れるかも…。」
と言った。

「あつあのサインいただけますか…私たちポケモンコーディネーターなんです！」

とアキが言うとユキは

「私はまだ旅立ったばかりでコンテストパス持ってないけど…。」
と言った。するとハルカは

「そうなの！それじゃあ頑張っしてほしいかも！」
と言うとどこからか色紙とペンを出してサインを書いた。

「はい！これ！」

と言いながら色紙を渡すとハルカは

「あなた達はもうすぐ開かれるコトブキ大会に出るの？」
と聞いた。するとアキが

「それは…ちょっといろいろありまして…出るなら次の大会からかなって…。」

と言った。

「そう…私はこれからシンオウ地方のコンテストに出るつもりだからまたどこかで会えるかも！それじゃあまたどこかで！」

と言うとハルカは去って行った。

「すごいね！ハルカさんと話せちゃったよ！サインまでもらっちゃったし！」

とアキが言うとユキは

「本当ね…。」

と答えた。それから思い出したように

「そうだ！マオちゃんへのお見舞いの花！」

と言つとアキは

「あー忘れてた！」

と言つと二人はふたたび花を選び出した。

一方こちらはロケット団の三人組

ダイキはスパナを握ると

「本当にいいのか…作って…これでシンオウ地方でコリンクを大量捕獲するために降りた予算がなくなっちゃうけど…。」

とエリに言った。

「いいから作りなさい！サンバ博士からの頼みよりも復讐が優先よ！」

とエリが言つとエリの携帯の着信音が鳴りエリが

「はい…もしも…。」

と電話に出ると電話の相手は

『ナンバである！』

と言つて電話を切った。

「そうそうナンバ…とにかく作りなさい！」

とエリが言つとマリコが

「でも…今回上手くいけばヤマダとコサブロウの地位を私たちのものにできるんですよ…。」

と言つた。するとダイキは

「確かにマリコの言うとおりで！リンバ博士は早急にコリンクを必要としているがヤマトとコサンジが別の任務で不在だから俺たちに頼んだんだ…下手に失敗するとこれつきりつてのもあるかも…。」

と言つた。その直後今度はダイキの携帯が鳴つたためダイキが「はいもしも…ダイキです。」

と出ると案の定電話の相手は

『ナンバである！』

と言って電話を切った。

「とにかく！つべこべ言わず作る！」

とエリが言っているとダイキはメカを作り出した。

「今に見てなさい…目に物見せてやるわ…。」

とその様子を見ながらエリはつぶやいた。その横でマリコは

「これでナンバ博士から信頼を得ようとかそういう話は消えたわね

…。」

とため息をしながらつぶやいていた。

つづく…

第九話 マサゴタウン それぞれの…（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

第十話 ホウエン地方のトレーナー

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅をしていたマオとユキはマサゴタウンにいた。

今マオは少しだけ外出の許可が出たため母と共に病院近くのベンチに座っていたにいた。

「マオ…旅続ける気なの？」

と母が聞くと

「もちろんだよ！ママ！」

と答えた。

「今回の事でどれだけ心配したことか…あなたは余分なことにまですぐに首を突っ込むから…」

と母が言うとマオは

「今度から気を付けるよ…。」

と言った。

「とにかく！フタバタウンに帰るわよ！」

と母が言うとマオは

「いやよ！まだ始まったばかりじゃない！」

と言つが母は

「そんなこと言って！退院したら帰るわよ！これ以上危険なことがあつたら大変じゃない！」

と言った。するとそのやり取りを近くで聞いてた少年が

「いいじゃないですか…本人が行きたいって言ってるんですから…」

「

と言った。

「あなた勝手に人の話に入らないでください！」

と母が言うとその少年は

「会話に勝手に入ったのは謝りますが…娘さんの意思も少し尊重し

てあげたらどうかと…。」
と言った。

「この子はまだ旅に出るのが早すぎたんです！だからこんなことに…。」

と母が言つと少女は

「だったら俺とポケモンバトルしませんか？俺が勝ったら俺達と旅をするということ…今この場にはいないんですけど幼なじみと二人でホウエン地方から来たのでシンオウ地方の人がいれば心強いです…やりますか？」

と言った。すると母は

「いいですよ…ところであなたは？」
と言った。

「俺はカナズミシティ出身のソウヤと言います…三対三のシングルバトルでどうですか？」

とソウヤが聞くと母は

「ええ…もちろんいいわよ！」
と答えた。

その頃花屋ではユキとアキがまだ花を選んでいた。

「これに決めた！」

とアキが言い会計を済ませるとユキは

「もうこんな時間…急がないと…。」

と言いながら小走りで花屋を出た。すると向こうから来た少女と肩がぶつかった。

「すみません！」

とユキが言つとその少女は

「いえいえ…ところで男の子みませんでした？私と同じ年ぐらいで黒い髪なんです…。」
と言った。

「いえ…見てませんけど…。」

とユキが言うと少女は

「そうですね…。」

と言った。

「よかつたら私たちも探すの手伝いしましょうか？」

とアキが言うと少女は

「ほんとうですか？私はイリスと言います…。」

と言った。

「私はアキです！」

「私は…その…ユキと言います…。」

と二人がそれぞれ自己紹介するとイリスは

「アキさんにユキさんですね…よろしくお願いします…ところでお

二人はなにか用事があるように見えるのですが…。」

と言いながらユキが持っている花を見た。

「これは…ちよつと友達のお見舞いに…。」

とアキが答えるとイリスは

「それでは先にそつちを済ませましょう…もしかしたらそこへ行く

途中で会えるかもしれませんし…。」

と言った。

「それじゃあ…病院から行こうか！」

とアキが言うとユキは

「もしかしたら…その病院に行く途中に大きな罠があつてそれで目

的は…。」

と言つがアキは

「あーもう！物事を悪い方ばかり考えてると本当にそうなるわよ

！」

と言いながらぶつぶつ言っているユキの手を引いて歩きだした。

ふたたびマオ達…

三人が病院の敷地内にあるバトルフィールドに来ると母は

「マオ！審判やって！」

と言った。

「はいはい…。」

と答えるとマオは二人の間に立ち

「これより！フタバタウン出身のマナ対カナズミシティ出身のソウヤのバトルを開始します！使用ポケモンは三体どちらかのポケモンがすべて戦闘不能になった時点で終了します！それではバトルはじめ！」

と言った。

そんな様子を見る三人組

「あの小娘結構元気になってきてるじゃない…そろそろメカもできてるでしょうから徹底的に足止めさせるのよ！」

とエリが言うとダイキは

「それで…なんだってあんなところに…」

と文句を言うとマリコは

「エリさんにしてはまともな作戦じゃない…」

と言ったがダイキは

「いや…目的が復讐って時点でまともじゃないからね…ってゆうかマリコいつのまに乗り気になってるのさ…きまでは任務が優先とか言ってたじゃん…」

と言った。するとマリコは

「そうでしたっけ…そういうことは録音しとけダメガネ！」

と言い放った。

「何で急にダメガネ呼ばわり！ってゆうか俺メガネかけてねーし！とダイキが言うがエリは

「とにかく！って徹底的にやるわよ！」

と言いマリコはその横で

「おー！」

と言っている。

「はーどうなることやら…」

と言つダイキのつぶやきは夕焼けの空にむなしく消えて行った。

じゅん…

第十話 ホウエン地方のトレーナー（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

なおソウヤとイリスはリクエストで登場したキャラです。

これからもよろしくお願いします。

第十一話 バトル開始！マナVSソウヤ

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅に出ていたマオとユキはマオが入院したためマサゴタウンにいた。

「バトル開始！」

と夕日を背にマオが言う。母は

「まずはこの子よ！行って！ポッチャマ！」

と言いポッチャマを出した。

「キルリア！バトルスタート！」

と言いながらソウヤがキルリアを出した。

『キルリア かんじょうポケモン ラルトスの進化系 サイコパワーでできた空間の裂け目から未来の出来事を見る力がある。晴れた朝は気分良く踊るといわれる。タイプはエスパー。』

「ポッチャマ！先手必勝ってことでバブルこうせん！」

ポッチャマがバブルこうせんを出す。

「キルリアかわしてれいとうパンチ！」

とソウヤが指示を出す。キルリアはバブルこうせんをかわすとれいとうパンチを繰り出しポッチャマに迫る。

「ポッチャマ！うずしお！」

れいとうパンチを出しながら迫っていたキルリアはそれに飲み込まれてしまう。

「ポッチャマ！つつく！」

「キルリア！レポートで脱出してエナジーボール！」

と言う指示を聞きキルリアはレポートでうずしおから脱出した後エナジーボールを放つ。

「ポッチャマ！つつくで破壊して！」

エナジーボールはポッチャマに迫るがポッチャマのつつくで破壊される。

(この戦術…どこかで…)

とソウヤが考え始めるが

「ポツチャマ！バブルこうせん！」

ふたたびぶるこうせんが飛んできたため一旦考えることをやめ

「キルリア！かわせ！」

と指示を出す。

(思い出せ…どこで見たんだ…確か…)

「ポツチャマ！連続でバブルこうせん！」

「キルリア！全部かわしてエナジーボール！」

ポツチャマは次々バブルこうせんをだしキルリアはそれをかわし続ける

(うずしおで閉じ込めて動きを止めておいてつつくで攻撃する…さらにその後のエナジーボールをつつくでことごとく破壊している…かなり厄介だな…でもエナジーボールは草タイプの技で水タイプのポツチャマにあたれば効果は抜群…この攻撃の突破口は…どこかで見てるはずなんだ…まてよ…確かマナさんはフタバタウンの出身…)

と考えていたソウヤの頭にあるコーディネーターの名前が浮かんだ。

「キルリア！レポートで後ろに回ってエナジーボール！」

キルリアはポツチャマの背後に回るとエナジーボールを出した。突然後ろから攻撃されたポツチャマはエナジーボールが直撃してしま

った。

「ポツチャマ！立って！」

とマナの声を聞き少し立ち上がるがポツチャマは倒れてしまった。

「ポツチャマ！戦闘不能！キルリアの勝ち！」

とマオが言うとマナはポツチャマに駆け寄り

「ポツチャマ…よく頑張ったわね…ゆっくり休んで…」

と言ってモンスターボールに戻した。

「なかなかやるわね…次はこの子よ！行って！ブイゼル！」

『ブイゼル　うみイタチポケモン　フローゼルの進化前　首にあ

る浮き袋に空気をためると浮き輪のように膨らみ水面に顔を出した
浮かぶ タイプはみず。』

（ブイゼルか…バシャーモだとタイプからして不利だな…。）
「キルリアこのままいけるか？」

とソウヤが聞くとキルリアはソウヤの方を向きうなずいた。

「一気に決めるぞ！キルリア、エナジーボール！」

「ブイゼル…れいとうパンチではじいて！」

キルリアはエナジーボールを放つがブイゼルがことごとくれいとう
パンチではじく

（このブイゼルもかなり鍛えられている…でも、ブイゼルは水タイ
プ…エナジーボールが当たれば効果は抜群…だったら！）

「キルリア！サイコキネシスからエナジーボール！」

キルリアはサイコキネシスでブイゼルを持ち上げてからエナジーボ
ールを放つが

「空中だからって何もできないなんて大間違いよ！ブイゼル！その
ままアクアジェット！」

ブイゼルのアクアジェットは落下する速度も加算されエナジーボ
ールとぶつかった。フィールドで爆発が起こりあたりが煙に包まれる。
煙が晴れるとキルリアとブイゼルが立っていたがキルリアは先ほ
どのポツチャマから受けたダメージからか倒れてしまった。

「キルリア！戦闘不能！よって勝者ブイゼル！」

とマオが言つとソウヤはキルリアをモンスターボールに戻し

「お疲れ様…。」

と言つた。

「さてと…これではお互いに二体ずつ…。」

とマオが言つとソウヤは

「次はこいつです！行け！バシャーモ！」

と言いバシャーモを出した。

つづく…

第十一話 バトル開始！マナVSソウヤ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくいお願いします。

第十二話 一進一退！マナVSソウヤ

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストに参加するため旅をしていたマオとユキはマサゴタウンにいた。

「次はこいつです！行け！バシャーモ！」

と言いつつソウヤはバシャーモを出した。

『バシャーモ もうかポケモン ワカシャモの進化系 パンチやキツクなどの格闘わざを身に付ける。数年ごとに古くなった羽が燃えて新しくしなやかな羽に生え変わる。タイプはほのお・かくとう』
「バシャーモ…確かハウエン地方の初心者用ポケモンの最終進化系だったかしら…」

とマナが言つとソウヤは

「ええ！そうです！」

と答えた。

「バシャーモはほのおタイプ！一気に決めるわよ！ブイゼル、アクアジェット！」

ブイゼルはバシャーモに向けアクアジェットで迫る。

「バシャーモ…よけてかみなりパンチだ！」

ブイゼルはアクアジェットでバシャーモの迫るがぎりぎりバシャーモにかわされかみなりパンチを受けてしまった。

「かみなりパンチ…なかなかやるじゃない…接近戦が無理ならブイゼル！みずのはどう！」

ブイゼルはみずのはどうを放ちそれはバシャーモに迫る。

「バシャーモ！よける！」

「ブイゼル！アクアジェット！」

バシャーモは上にはねてよけるがブイゼルのアクアジェットに直撃してしまった。

「バシャーモ！」

バシャーモはソウヤの呼びかけにこたえるかのように立ち上がる。

「バシャーモ…まだいけるか？」

とソウヤが聞くとバシャーモはうなずいた。

「それじゃあ…バシャーモ…かみなりパンチ！」

「ブイゼル！れいとうパンチ！」

バシャーモとブイゼルはそれぞれ攻撃を出しながら衝突しお互いの技がぶつかり爆発した。

煙が晴れると二体とも立っていたがお互いを見た後倒れてしまった。

「ブイゼル、バシャーモともに戦闘不能！よってこの勝負引き分け！」

とマオが言うと二人はブイゼルとバシャーモをそれぞれモンスターボールの戻し

「よく頑張ったな…ゆつくり休んでくれ…。」

「ゆつくり休んでて頂戴…。」
とそれぞれ言った。

「なかなかやるわね…でも、この子は早々負けないわよ！」

と言いながらマナがモンスターボールを構えるとソウヤは

「俺だつて負けませんよ！」

と言いモンスターボールを持った。すると二人は

「最後はこの子よ！行ってフカマル！」

「最後はこいつです！行けフカマル！」

と言いながらお互いにフカマルを出した。

そんな様子を見る三人組

「ねえ…エリ、ダイキ…あのソウヤとかいう人…どこかで見たことあるような気がするんだけど…。」

とマリコが言うとダイキは

「言われてみれば…どっかで見たことあるような気がするな…。」
と言った。するとエリは

「確か…ハウエンリーグに出てたわね…。」
と言った。

「そうそう…思い出しました…確かハウエンリーグでベスト8でしたわね…。」

とマリコが言うとエリは

「だったら復讐ついでにあいつのポケモンもいただきましょう!」
と言った。するとマリコは

「復讐までならまだしもそれは欲張りすぎじゃ…。」
と言いだいきは

「だから復讐まではって何?復讐よりやることあるんじゃないの?」

と言うがエリは

「考えてもみなよ…たとえばさっきのキルリアを捕まえてサカキ様に献上すれば…。」

と言いだいきが

「どうなるんだよ?」

と言うとエリは

「サカキ様はいつも忙しくあっちこっちを移動されているでしょ…。」

「

と言うとマリコは

「ええ…まあ…。」

と相槌を打つ

「でも…『しまった!忙しすぎて間に合わない!』っていうようなときに私たちが献上したキルリアがやってきて…レポートでサカキ様を時間通りに目的地へ…『ふう…間に合ってよかった…これもあいつらが送ってきてくれたポケモンのおかげだ…何か褒美をやらねば…』となれば…。」

とエリが言うとマリコは

「なるほど…」

と言いだいきとマリコが

「幹部昇進！スピード出世で絶好調！」

と二人で言うがダイキは

「そんなにうまくいくのか？」

と言った。するとエリは

「そこを何とかするのがあなたの仕事でしょうが！」

と言った。するとダイキは

「やっぱり…ってゆうかあつちに仕掛けた罠にそろそろかかっている

ことじゃないの？あいつの仲間…。」

と言った。するとエリは

「そうね…ちよつと見に行きましょうか…。」

と言いわなを仕掛けた場所へ歩き出した。

つづく…

第十二話 一進一退！マナVSソウヤ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第十三話 決着！マナVSソウヤ

コトブキシテイで開催されるポケモンコンテストに出場するためコトブキシテイへ向かっていたマオとユキはマサゴタウンにいた。

「フカマル同士ね…。」

とマナが言くとソウヤは

「そのようですね…。」

と言った。

『フカマル りくザメポケモン ガバイトの進化前 大口を使った攻撃は威力が十分だがまだうまく戦えず自分も傷つく。 タイプは

ドラゴン・じめん』

「フカマル！りゅうのいかりよ！」

とマナが言くとソウヤは

「こっちもりゅうのいかりだ！」

と指示を出した。二つのりゅうのいかりはフィールドの真ん中でぶつかる。

「威力はほとんど同じか…。」

とソウヤが言くとマナは

「そのようですね…私、これでもシンオウリーグベスト8なんです…。」

と言った。するとソウヤは

「やはりそうでしたか…かつてコーディネーターでありながらジム戦もこなしグランドフェスティバルで優勝し、さらにシンオウリーグベスト8という成績を残して引退した伝説のコーディネーター…その独特の戦術の組み立てからついた名前はシンオウの奇術師マナ…その当時としては斬新なバトルスタイルは多くのコーディネーターが現在も参考にしている…それがあなたですよね…。」

と言った。

「あら…ハウエン地方のトレーナーなのによく知ってるわね…私が引退したきつかけはマオの事があつたらで5年も前なのに…。」
とマナが言つとソウヤは

「俺がまだ子供だったころ俺が住んでいる街で開かれたポケモンコンテストを幼なじみに連れられて見に行つたとき偶然見たんですよ…それで興味を持つてあなたの事を少し調べていたんです…それで少しそうでないかと疑っていたのですが…ついさっきマナさんが言つたシンオウリーグベスト8つてという言葉で確信しました…あなたがあのコーディネーターだつて…。」
言つた。

「あら…その幼なじみに感謝しときなさい…でもいくら情報を知つていても私に勝てるとは限らないわよ…フカマル！あなをほる！」
とマナが言つとソウヤは

「こつちもあなをほるだ！」
と言い地面の中で双方の技がぶつかる。

「こつなつたら…フカマル…りゅうせいぐん！」

とマナが言つとソウヤは
「まずい！フカマルよける！」

と指示を出すマナのフカマルが出したりりゅうせいぐんはソウヤのフカマルに直撃した。

「フカマル！」
とソウヤが言つとフカマルは立ち上がりソウヤの方を見た。

「フカマルにドラゴンタイプの技は効果抜群…かなりのダメージを受けたんじゃない？」

とマナが言つとソウヤは
「まだまだ…フカマル！あなをほる！」

と言つた。

「いくらやつても無駄よ…フカマル…相手の居場所を見つけて…」
とマナが言つとソウヤは

「フカマル！地面から出てドラゴンクロー！」

と言った。とつぜんマナのフカマルの背後から出たソウヤのフカマルはドラゴンクローを命中させ突然後ろから攻撃を受けたマナのフカマルは吹っ飛ばされた。

「フカマル！」

とマナが言つとマオが

「フカマル！ 戦闘不能！ よって勝者カナズミシティ出身のソウヤ！」
と言った。マナはフカマルに駆け寄ると

「頑張ったわね…。」

と言つてからソウヤの方を向き

「なかなかですね… 実力はもとよりあなたのポケモンはあなたをか
なり信用していますね… これだったらマオと旅させても大丈夫だと
思います… よろしくお願いします…。」

と言った。するとマオは

「すごいね！ ママに勝つなんて！ これからよろしくね！ ソウヤ！ と
ここで一緒に来たつていう幼なじみはどこにいるの？」

と言った。するとソウヤは

「そういえば… 確か… 用があるからつて言うから俺が先にシンオウ^{こうち}
に来て… 後から来るつて言つてたから… そういえば今日は何日だ？」
と言った。マオが今日の日付を告げるとソウヤは

「そつだ！ 今日だった！」

と言った。

「えっ！」

とマオが言つとソウヤは

「少し探してくる！」

と言つてその場を後にした。

ちょうどそのころ病院の入り口に続く道を歩いていたユキ、アキ、
イリスは落とし穴に落ちていた。

「もーなんなのよ…。」

とアキが言つと見覚えのある三人組が出てきて

「もーなんなのよ…と言われても答えないのが常識だが…まあ今回ぐらいは答えてやるっ！」

「光よ！」

「水よ！」

「ポケモンよ！」

「天をも震わせるミュージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば」

「誰もが立ち止まる重い響き」

「エリ！」

「マリコ！」

「ダイキ！」

「今回も主役は私たち！」

「我ら天下無双の」

「『『ロケット団！』『』」

と名乗るとエリが

「あなた達はしばらくそこにいなさい…。」

と言い三人はその場を後にした。

つづく…

第十三話 決着！マナVSソウヤ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

第十四話 落とし穴の中で…

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅に出ていたマオとユキはマサゴタウンにいた。

ユキとアキそしてイリスはロケット団の掘った落とし穴に落ちていた。

「何なんですか…あの人たち…。」

とイリスが言うとアキは

「人のポケモン奪ったりする悪い人たちよ！」

と答えた。

「でも…どうやってたらここから出られるかな…もしかしたら…一生ここから出れなくて…それで…」

とユキが言うのをさえぎるようにアキは

「ここはマサゴタウンのはずれとはいえ病院へ続く唯一の道なのよ！いつか助けが来るって！」

と言って励ました。するとイリスが

「それは結構先になるんじゃないかしら？」

と言った。

「どういうこと？」

とアキが聞くとイリスは

「もう夜になるのよ…この先にあるのは病院だけって言うてましたよね…だったらこんな時間に人は通らないと思いますけど…」
と意見を述べた。

「そういえば…」

とアキが言うとユキは

「そうよね…。」

と言った。

「…誰か助けてー！！！！」

と言う三人の声は夜の闇に消えて行った。

マナとのバトルを終えたソウヤは焦ってマサゴタウンのポケモンセンターへ戻ろうとしたがマナが

「もう時間は遅いですし今日はこっちにいたらどうです？山の上にあるこの病院から暗い夜道を通ってふもとのマサゴタウンに戻るの
は危険ですし…謝ればその幼なじみも許してくれるんじゃないかし
ら？」

と言ったため病院にとどまっている。

「そういえば…ユキちゃん遅いね…。」

とマオが時計を見ながら言うソウヤが

「ここまで来るのが危ないからってふもとにいるんじゃないのか？
と言った。するとマオが

「それならいいけど…ユキちゃんの性格と言うか…なんというか…。」

と言った。そしてそのあとにつづくように

「そうだよね…やっぱり5年前からずっとそうよね…。」

とマオが言った。

(5年前？そういえばマナさんが引退したのも5年前…マオの事が
とか言ってたけど…5年前に何があったんだ…。)

とソウヤが考えているとマオが

「ちよつとそこまで様子見てくる！」

と言つて病院の外に出た。

「マオ！あなた入院してる身なんだからおとなしくしてなさい！
と言いながらマナが外へ出るとソウヤもそれに続いた。

ふたたび落とし穴の中…

「救助が来ない以上私たちで脱出するしかないと思います…。」
とイリスが言うとアキは

「具体的にどうやって？」

と聞いた。

「そうですね…つるのむちとか使えるポケモン持っていないませんか？」
とイリスが聞くとアキが

「だったら私フシギダネなら持ってますけど…。」

と答えた。するとイリスは

「それでしたらフシギダネを出していただけますか？」

と言った。するとアキは

「いいけど…」

と言いながらフシギダネを出した。

『フシギダネ たねポケモン フシギソウの進化前 生まれてからしばらくの間は背中の種から栄養をもらって大きく育つ。 タイプはくさ・どく』

「フシギダネを使ってどうするの？」

とアキが言つとイリスは

「あそこの木につるのむちをひっかけてそれを伝えて脱出するんです！」

と言った。

「あーなるほど！それならいけそう！」

とアキが言つとユキは

「もしかしたら…途中でフシギダネが…」

と言つがアキは

「フシギダネ！つるのむち！」

と指示を出した。フシギダネのつるのむちは木にしつかりと結びついている。

「まずはイリスから行って！」

とアキが言つとイリスは

「はい…わかりました…」

と言つてからつるのむちを少し引っ張り登り始めた。イリスが上まで登り

「大丈夫ですよ！」

と言いながら手を振るとアキは

「次はユキちゃんよ行つて！」

と言つた。するとユキは

「いや…でも…アキちゃんは…。」

と言つた。するとアキは

「私なら大丈夫だから…必ずあとから行くよ…こんな穴からぐらい出れるよ！」

と言つた。

「私なら大丈夫…必ずあとから…行く…。」

とつぶやくとユキは頭を抱え込んでしまった。

「ちよつと！どうしたの？ユキちゃん！」

尋常でない様子のユキを見てアキはユキの肩を揺さぶりながら言つた。

「大丈夫ですか？」

と上からイリスの声が聞こえる。肩を揺さぶられているユキの頭にある男の子との会話が響いていた。

『なにをやつてるんだよ！早くマオと逃げろ！』

『でも…お兄ちゃんは？』

『俺は大丈夫だから…必ずあとから行く！』

『絶対だよ！』

『もちろんだ！お前こそちゃんとマオというよ！』

『うん！』

「ねえ！ユキちゃんつてば！」

アキが話しかけるがユキは

「もういや…あの時みたい…これ以上失いたくない…。」
とつぶやきまた黙ってしまったあと意識を失ってしまった。
「ユキちゃん！」

つづく…

第十四話 落とし穴の中で…（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

第十五話 ロケット団の逆襲

コトブキシティで開催されるポケモンコンテストに出場するため旅をしていたマオとユキはマサゴタウンにいた。

マオが走っていると

「待てよ！マオ！」

と言いながらソウヤがマオの腕をつかんだ。

「ユキちゃんを探さないと！早くしないと！」

と言うマオをソウヤの後ろから追いかけてきたマナが

「マオ！病院に戻らないと！ユキちゃんなら大丈夫だから！」

と言った。するとマオは

「あのとときだつてそうじゃない…タツヤ兄ちゃんなら大丈夫だからつてそう言ったのに！」

と大声で言つて泣き出してしまった。

「今度は絶対に大丈夫よ！」

とマナが言うがマオは

「そんな保証がどこにあるのよ！5年前ママはそう言つてホウエン地方に行つちゃったじゃない！なんか変な感じがするのよ…あの時…ママがホウエン地方に旅立つ前の日に感じた…あの時の感じと…また何か大切なものがなくなる気がする…。」

と言いながらマオは泣き続けている。

その時巨大なメカがふもと側からやってきた。

「何！あれ？」

とマナが言つと

「何！あれ？と言われても答えないのが常識だが…まあ今回ぐらいは答えてやろう！」

と言う声と共にメカの頭の部分から三人組が姿を現して

「光よ！」

「水よ！」

「ポケモンよ！」

「天をも震わせるミュージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば」

「誰もが立ち止まる重い響き」

「エリ！」

「マリコ！」

「ダイキ！」

「今回も主役は私達！」

「我ら天下無双の」

「「「ロケット団！！！！」」」

と名乗った。

「ロケット団？何でカントーで暗躍している組織が…。」

とソウヤが言うとエリは

「ちよつとした復讐よ…その娘にね！」

と言いながらマオを指差した。

「何？逆恨み？」

とマオが言うとマリコは

「ええ…そんなところですよ…。」

と言った。すると横にいたダイキが

「認めるのかよ！」

と言った。

「なんかよくわかんねーけど…こんなメカ…フカマル…りゅうのいかりだ！」

と言いながらフカマルを出しそのフカマルが出したりゅうのいかりはメカを直撃した。

「もう一発りゅうのいかり！」

とソウヤが指示を出すとエリが

「あら…いいのかしら…そんなことをして…」
と言つとソウヤは

「待った！フカマル！」

と言つたがもう攻撃はメカにあたつた。

「どういふことだよ…」

とソウヤが言つとエリは

「このメカとユキとかいうやつとアキとあと…一人…イリスとかい
つたかしら…がいる落とし穴とこのメカにはある細工がしてあるの
…。」

と言つた。

「細工つてなんだよ！俺聞いてねーぞ！」

「そうですよ！私も聞いてません！」

とダイキとマリコが言つとエリは

「細工つて言つても仕組みは単純…このメカが受けたダメージはそ
のまま落とし穴の中の人間に与えられる…それがどういふことかわ
かる？」

と言つた。するとマオは

「つていふことはさっきのりゅうのいかりのダメージは！」

と言つとエリは

「そっくりそのまま落とし穴の中の人間に伝わっているのよ…どう
？驚いた？」

と言つた。

「そんな手を使うなんて！許せない！」

とマナが言つとエリは

「許せなくて結構！それでこそ悪役よ！」

と言つた瞬間メカが崩れ始めた。

「ちよつと！どうなってるのよ！」

とエリが言つとダイキは

「予算が少なくて強度が弱いつえに変な細工するからだよ…。」
と言つた。するとエリは

「それじゃあ…まさか…。」
と言った。するとダイキは
「まあ…そのまさかだな…。」
と言った瞬間にメカが爆発し
「…やな感じー!」
と言いながら三人は飛ばされて星になった。

ちょうどそのころアキは何かユキを起こして穴の外の脱出させた後に穴を出ようとした。その時なにか大きな衝撃を感じ狭い穴の中で吹き飛ばされた。

「キヤ!」

とアキが言っているとイリスは

「大丈夫ですか?アキさん?」

と話しかけた。アキが

「大丈夫よ…何とか…。」

と言って体を動かそうとするが足をけがしたらしく動けない。

「アキちゃん!」

とユキが言っているとアキは

「ユキちゃん!イリス!誰か助けを呼んできて!ここからならすぐ

に病院に着くはずだから…。」

と言った。

「でも…アキちゃん!」

とユキが言っているとアキは

「大丈夫よ!絶対に!」

と言った。するとユキは

「今度は大丈夫…今度は大丈夫…。」

と自分に言い聞かせるように言ったあとイリスと共に病院の方へ駆けて行った。

「ユキちゃん…頑張つて…。」

とアキがつぶやくとまた大きな衝撃が襲いパラパラと壁が崩れ始め

る。

「これはちょっとやばいかもね…。」
とつぶやくと自分の持っているモンスターボールを穴の外に向かって投げポケモンたちを外に出した。

そのあとの大きな音とともにアキの意識は闇の中に沈んでいった。

つづく…

第十五話 ロケット団の逆襲（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

次回から新章に入ります。

これからもよろしくお願いします。

第十六話 アキの思い

マサゴタウンでの出来事からもうすでに二か月がたった。アキは生き埋めになる直前に近くを通りかかったポケモントレーナーのポケモンが出したサイコネシスで間一髪脱出できたがそれまでに受けたけががひどく旅をつづけるどころか歩くのも困難と診断された。あのロケット団三人組は指名手配されたがいまだ捕まらず、もともと孤児で身寄りのなかったアキはマオの家に住むことになった。

シンオウ地方 フタバタウン マオの家

マオがいつも通り慣れた手つきで朝食を作っているとアキが車いすに乗って出てきて

「おはよう…マオちゃん…。」
と言った。

「アキちゃん！おはよう！」

とマオは元気よくあいさつを返すがあの日以来アキはまったく笑顔を見せない。

（まるであの時のユキちゃんを見てみたい…でもユキちゃんの方が重傷だったかな？）

と思っていると台所に焦げ臭いにおいが漂ってきた。

「マオちゃん…。」

とアキに言われ現実に戻ったマオは

「いけない！焦がしちゃった！」

と言いながら焦げた卵を皿に盛り付ける。

そのあとマナがあくびをしながら起きてきて

「また焦がしてるじゃない…まったく…トーストはうまく焼くのに…。」

と言いながら真っ黒になった明らかに体に悪そうな卵を食べる。朝

食を食べているとアキが

「あの…マオちゃん…。」

と話しかけた。

「どうしたの？アキちゃん…。」

とマオが言うとアキは

「マオちゃんってさ…もう旅に出る気はないの？」

と聞いた。それに対しマオは

「うーん…確かに旅には出たいけど…アキちゃんの事ほったらかしにして旅に出るわけにはいかないからずっとここにいるつもりよ…。」

「

と答えた。

あの後ソウヤとイリスは1週間ほどフタバタウンにいたがアキとマオに言われアキやマオそしてあの日以来部屋に引きこもってしまったユキの事を気遣いつつポケモンジムがあるクロガネシティへ向かって旅立った。

マオが黙っているとマナが

「そういえばさっき聞いたんだけどヒナコちゃんが帰って来るそうよ…今日の昼にはつくらしいからアキちゃんと行って来たら？もちらん…ユキちゃんも誘って…。」

と言った。

「どうする？アキちゃん…。」

とマオが言うとアキは

「私も行く…。」

と言った。

「ヒナコと会うの久しぶりだな！」

と言いながらマオは朝食を食べ終えアキの車いすを押しユキの家に向かった。

二人がユキの家に行くとユキの母親が出てきて

「あら…マオちゃんにアキちゃんじゃない…どうかしたの？」

と聞いた。

「ママからヒナコが帰って来るって聞いたからユキちゃんと一緒に
行こうかな？って思ってた。」

とマオが答えるとユキの母は

「そうね…ちよつと声かけてみるわ…。」

と言い家の中に入って行った。

数分後ユキの母はマオ達のところに戻ってきて

「ダメだったわ…部屋から出る気ないみたい…。」

と言った。

「そうですね…私たちは広場にいるので気が向いたら来るように言
っておいてください…。」

と言つと二人は広場に向かった。

広場に向かう二人をユキは二階の窓から見ていた。

（私のせいだ…私になかなか行かなかったから…だからアキちゃん
が…出て行っても口きいてくれるわけないよ…マオちゃんだって5
年前の事件の後しばらく口きいてくれなかったもん…たぶんまたあ
の時みたい…。）

とユキが思っていることを知ってか知らずか母がドアの向こうから
「マオちゃんが気が向いたら広場に来て！だって…行ってあげたら
？さびしがつてたわよ…。」
と言った。

「いいの！さつきも言ったでしょ！私は行かない！
とユキが言つと母は

「そう…。」

と答えて階段を下りて行った。

そんな様子をニヤース型気球から見ている三人組

「やつと来れたわね…シンオウ…。」

とエリが言つとマリコが

「ところで何でまたシンオウに来たんですか？ 私たち指名手配されてますしそもそもマサゴタウンの一件でくびになるところだったんですよ…。」

と言ひそれに続くようにダイキが

「そうだよ…なんとか給与カットと2か月の特別指導で済んだんだおとなしくしておいた方がいいんじゃないのか？」

と言つた。するとエリは

「うるさいわね！一度ならず二度もやってくれたのよ！パパにもぶたれたことないのに！三度目の正直って言葉があるでしょうが！」
と言つた。

「使い方間違つて…はいないか…でも任務を優先した方が…。」
とダイキが言つとマリコは

「どちらにしろシンオウでやっても任務には変わりありませんわ…ただ予算が前よりかなり少ないので…あまり下手には動けませんね…。」

と意見を述べる。しかし、エリは

「任務はポケモンの大量捕獲。トレーナーのポケモンでも関係ないでしょ…。」

と言つてからダイキの方を向き

「ダイキ！なにかメカを作つて！今度はちょっとやさつとじゃ壊れないやつ！」

とエリが言つとダイキは

「勝手な改造しないならね…。」

と言つた。するとエリは

「それは約束する！」
と言つた。

「わかつたよ…。」

と言つとダイキはメカを作る場所を探しだした。

第十六話 アキの思い（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

第十七話 帰ってきたヒナコ

フタバタウンに住み少女マオはひさしぶりにフタバタウンに帰ってきたヒナコに会うためアキと共に広場に向かっていた。

「ねえ…マオちゃんはヒナコさんと知り合いなの？確かグランドフエステイバルで上位を取ったと思うけど…。」
とアキが聞くとマオは立ち止まり

「うん…まあね…昔はよく遊んだな…ユキやヒナコと一緒におままごとやったりユウト君たち男の子の鬼ごっこを一緒にやってみたり…それに…なによりもあのころはタツヤ兄ちゃんがいた…。」
と答えた。するとアキは

「そうなんだ…。」
と言いながらマオの顔を見るとなんだか過去を懐かしむというより悲しげな顔をしていた。

「マオちゃん…？」

とアキが言つとマオは我に返り

「何でもないわ！早く広場に行きましょう！」

と言いふたたび車いすを押して歩き出した。

（マオちゃん…今すぐく悲しそうな顔をしてた…タツヤって人が何か関係あるのかな？）

とアキが考えているといつの間にか寝てしまった。

「ねえ…アキちゃん…。」

と話しかけながらマオがアキを見ると規則正しく寝息を立てている。
（寝ちゃってるのか…だったら起こすのはかわいそうかな…。）

と思いマオはそのまま広場に向かって歩いて行った。

広場に着くと寝ていたアキを起こしヒナコが到着するのを待った
10分ほど待っていると

「マオちゃん！ひさしぶり！」

と言いながらヒナコがやってきた。

「久しぶり！キナコ！」

とマオが言っているとヒナコは

「キナコじゃなくてヒナコよ！ヒナコ！まったく！マオちゃんまで！」

と言った。

「ごめん！ごめん！前ヒカリが帰ってきたとき町の外に出かけてて会えなかったからさ……。」

とマオが言っているとヒナコは

「そういえばこの子は？」

と言いながらアキを見た。

「この子は……。」

とマオが言っていると大きな音とともにポツチャマ型のメカがやってきた。

「うっそ！このポツチャマ大きくてかわいい！」

とマオが言っていると

「うっそ！このポツチャマ大きくてかわいい！と言われても答えないのが常識だが……まあ今回ぐらいは答えてやるう！」

と言っているとあの三人組が姿を現し

「光よ！」

「水よ！」

「ポケモンよ！」

「天をも震わせるミュージック」

「海に帰りし美しきビーナス」

「神か閻魔かその名を呼べば」

「誰もが立ち止まる重い響き」

「エリ！」

「マリコ！」

「ダイキ！」

「今回も主役は私たち！」

「予算が余ったから自爆装置付けてみました！」
と言った。

「そんなん付ける必要ないでしょ！」
とエリが言うつと

「3…2…1…0！」

とカウントされ

「それじゃあ…やっぱり…。」

と言った瞬間メカが爆発した。

「まったく！変な機能付けないでよ！」

と飛ばされながらエリが言うつとマリコが

「あなたも人のこと言えないんじゃない…。」

と言いだいきが

「それじゃあそろそろ…。」

と言うつと三人は

「…「やな感じー！！」「」

と言いきらんとお星さまになってしまった。

飛んで行ったロケット団を見てヒナコは

「ロケット団つてうわさには聞いてたけどよく飛ぶのね…。」

とつぶやいた。

「そうだ…結局その子はだれなの？」

とヒナコが聞くとマオはアキについて簡単に説明した。

ヒナコは話を聞くと

「そうなんだ…ロケット団許せないわね！アキちゃん！大丈夫！き
つとあんな奴ら…。」

と言ったがマオが

「ヒカリと一緒にヒナコが大丈夫！つて言うときは一番危ないよね
…。」

と言った。するとヒナコは

「そうかな…そうだ！さっきの話だとマオちゃんはもう旅には出ないの？」

と聞いた。マオが

「そうだけど…。」

と答えるとヒナコは

「それならちよつと提案があるんだけど…。」
と言った。

「提案？」

とマオが聞き返すとヒナコは

「あのね…。」

と話し始めた。

つづく…

第十七話 帰ってきたヒナコ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1484x/>

遙かなる旅

2011年10月28日06時02分発行